特集

かけがえのない、命を育む

「命」がこの世に誕生した瞬間、人は初めて子育てを開始します。
最初は戸惑い、うまくできなくて当たり前。
では親になった皆さんは、命とどう向き合っているのでしょうか。
久保さんファミリーと伊藤さんファミリーの子育てを通して、
大切な命を守る「子育て」の在り方を
一緒に考えてみませんか―。

流産を繰り返す「不育症」に

20歳のとき、続く微熱と背中の痛みから病院を受診し、心筋梗塞と診断された久保美樹さん。詳しい検査の結果、膠原病の一種である「抗リン脂質抗体症候群」と診断されました。これは、血液中の自己抗体が誤って自分の正常な細胞を攻撃してしまう自己免疫疾患のこと。血液中に血栓ができやすくなる血栓症や流産を繰り返す不育症を引き起こす可能性のある難病です。「日常生活に支障はなかった」と話す美樹さんですが、「将来妊娠したら、血流を良くする薬を注射しなければならないと聞かされました」と振り返ります。

裕介さんと結婚後妊娠し、治療をしながら命を育んでいたものの、妊娠高血圧症を併発した美樹さん。腎機能や胎盤機能が低下し、本来血液に乗って赤ちゃんに運ばれる酸素や栄養が届かなくなり、妊娠23週で死産しました。

その後も専門医のいる大学病院で治療を継続しますが、「妊娠はできても、お腹の中で赤ちゃんを育ててあげられないんです」と美樹さんが話すように、何度も流産を繰り返し、「不育症」と診断―。美和ちゃんを授かったのは、4回目の妊娠のときでした。

CASE 1 久保さんファミリー ＝塩屋＝
（写真㊧から）裕介（ゆうすけ）さん 美樹（みき）さん 美和（みわ）ちゃん

たくさんの大きな愛情で、小さな命を包む

320グラムで生まれた女の子

美和ちゃんを妊娠中も妊娠高血圧症の併発で脳けいれんを起こすなど、「赤ちゃんを諦めなければならないかもという綱渡り状態で―。何とか23週まで持ってくれた」と話す美樹さん。美和ちゃんの心拍数が下がったため緊急手術となり、妊娠23週6日、320グラムの小さな命が誕生しました。

待望の第1子誕生に、「やっと命ある形で生まれてきてくれた。目の前にいるこの子をしっかり育てなきゃって、その一心でした」と涙ぐむ美樹さん。当時、美樹さんが入院している神戸へ休日の度に通っていた裕介さんも、「出産後の止血に3時間以上かかって―。2人とも無事でよかった」と振り返ります。

多くの臓器が未発達で手術や医療的ケアが必要になることが多い低出生体重児。まずは3日生きられるか、1週間生きられるかと新生児集中治療室（NICU）で命をつないだ美和ちゃんも、未熟児網膜症によるレーザー治療を受けました。

半年後、呼吸や体重が安定し、退院前に受けたMRI検査―。そこで左の小脳が無いことが判明しました。担当医師から、「欠損の事例はないが、バランス感覚に影響が出たり、物との距離感がつかめないなどの症状が出るかもしれない」と聞かされた久保さん夫婦。しかし、「子どもの可能性は未知数だから―」という医師の言葉に希望を持ち、我が子の成長を信じてサポートしようと決意しました。

松前町で始まった3人の新生活

町外出身で、結婚後松前町に家を建てた久保さん夫婦。周りに頼る人がいなくて不安を抱える中、役場に相談できることを知ったのは、「こんにちは赤ちゃん訪問」のときです。これは、町内に住む出生後4カ月までの赤ちゃんがいる家庭を保健師と保育士が訪問し、身体測定や利用できるサービスの紹介をするもの。子育ての不安を相談できるおしゃべりの場でもあります。美樹さんは、「保健師さんに相談すると、すぐに動いてくれて答えが返ってくるので心強かった」とにっこり。美和ちゃんが1歳になり、リハビリ開始のために病院を受診しようにも予約が取れなかったときは、「自宅でリハビリをしてくれる訪問看護という制度を教えてくれて―。施設も一緒に探して調整してくれた」と話す美樹さん。「当時は車を運転できず、夫の休日しか動けなかったので助かった」と振り返ります。

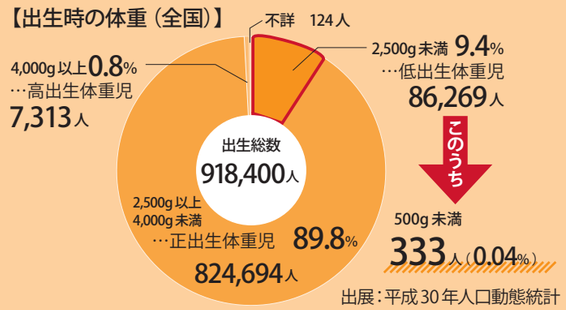
気になる Q&A

出生時の平均体重はどのくらい？

厚生労働省の「平成30年人口動態統計」によると、出生児の平均体重は、3,000グラム。2,500グラム未満の低出生体重児は全体の9.4%です。

低出生体重児は、出生後に医療的ケアが必要となる場合が多く、発育や発達の遅れや健康に係るリスクが高いといわれています。

【出生時の体重（全国）】



出展：平成30年人口動態統計

一歩ずつ、着実に前へ―。

成長とともに増える喜び

シール貼りや粘土遊びが大好きな美和ちゃんは、現在4歳。昨年4月に児童発達支援センターあゆみ学園（下のQ&A参照）に入園し、少人数の集団生活で刺激を受けながら、楽しく園生活を送っています。

一方、訪問看護と通院でリハビリも継続。生活に必要な作業面を鍛えるため、ブロックの付け外しやカプセルの開け閉めなど指先を使う動きの練習をしたり、言葉の発達を促すため、ストローを使って「う」の形になるよう息を吐く練習や「ブーブー」「プンプン」などの擬音語を使った絵本の読み聞かせなどを行ったりしています。

裕介さんが、「泣いてでもやり遂げる頑張り屋さん」とたたえるように、足の筋をほぐしたり、階段の上り下りやブランコなどで体幹を鍛えたりと運動面のリハビリも続けたことで、3歳から歩き出した美和ちゃん。まだ不安定さは残るものの、散歩をしたり、公園で近所のお友達と遊んだりするなど、活動の幅が広がりました。

「一緒に遊べるようになると、自然とお母さんたちとも仲良くなれて―。近所に住む人も、『美和ちゃん上手に歩けるようになったね』と声を掛けてくれるのでうれしい」と美樹さんがほほ笑み、「近所に猫を飼っているおじいさんがいて、『いつでも見に来ていいよ』と言ってくれるので美和も喜んでいます」と裕介さんが笑うように、美和ちゃんの成長とともに、地域で見守られている温かさを実感しています。

頼れる存在は、すぐそばに

「子育ては初めてのことばかりで、どうしても神経質になるし分からないから不安になる」と話す美樹さんですが、「知らないだけで、頼れるところはたくさんあった」と振り返ります。「役場の保健師さん以外にも、例えばあゆみ学園の先輩ママたち。子どもの歩行を支えるためにハイカットのインソール装具が必要だけど、なかなか手に入らなくて―。園で使う置き靴が用意できずに困っていると、『このメーカーの靴でよかったら使ってみてください』とおさがりをくれたり、いつもプラス思考で経験談を教えてくれたり―」と振り返る美樹さんは、「そうやって教えてもらったことを、今度は次に入園してくる子のお母さんたちに伝えていけたらいいな」と意気込んでいます。

経験したから分かること

「不育症はあまり知られていないと思うんです」と話し、当時は自分だけがつらい思いをしていることを嘆いていたという美樹さん。「でも同じ症状で入院している人から、6回の流産を経験したと聞いて―。知らないだけで、自分よりもつらい思いをしている人がたくさんいるのかもしれないと考えるようになった」と振り返り、「同じ病気で苦しんでいるお母さんに、一人じゃないと伝えたい。家族だけで悩んでいても良い答えは見つからないので、いろんな場所で出会う味方に相談してほしいです」と力強く話します。

また、裕介さんが、「積極的に収集した情報を、プラスに考えられたら―」と話すように、最近療育手帳を取得した美和ちゃん。美樹さんも、「障がいの受容など難しい面もあるようですが、遊びの場でも料金の割引があるなど良いことがあります」と話します。

夜遅くに帰っても、園からの連絡帳を必ず確認するという裕介さんに、美和ちゃんの言葉の発達を促すために積極的な言葉掛けを心掛けている美樹さん。「美和ちゃんにとってのベストは何か」を常に考え、サポートを続ける2人に愛されながら、美和ちゃんは一歩、また一歩、着実に大きく成長していきます。

▼先生と砂場で遊ぶ美和ちゃん

気になるQ&A あゆみ学園ってどんなところ？

「児童発達支援」という障がい児通所給付サービスが利用できる施設です。未就学児を対象に、日常生活における基本的な動作の指導や集団生活への適応訓練など、子どもの発達段階や発達の特性に応じた支援を行います。

美和ちゃんのように毎日通所するほか、保育所や幼稚園に通いながら週1、2回程度通所する場合もあります。

気になるQ&A どこに相談すればいいの？

障がい児の各種障がい福祉サービスの利用は、福祉課障がい福祉係（左記）か町委託指定相談支援事業所にご相談を。必要な情報提供や関係機関との連絡調整などを行います。

▶**町委託指定相談支援事業所**（相談は無料）

親愛福祉相談所　☎961-6916

あゆみ学園指定相談支援事業所　☎972-0999

気になるQ&A 療育手帳って何？

療育手帳とは、都道府県が交付する、知的障がいのある人が各種サービスや援助を受けやすくするための手帳です。運賃や公共料金の割引などが受けられます。申請方法など詳しくはお問い合わせください。

問福祉課障がい福祉係　☎985-4112

Interview

一人一人のペースに合った、成長のきっかけ探しを

児童発達支援センター あゆみ学園
児童発達支援管理責任者
今村 高博さん

入園してからの美和ちゃんの成長はめざましく、遊びの中で大きな声が出せるようになったり、トイレを成功させたり、体力もついて園生活に余裕が出てきました。ご夫婦共に美和ちゃんを大事にして、愛情を注いでいることが伝わってきます。

あゆみ学園は、家庭や学校でいかにうまく適応できるか、そのヒントやきっかけ探しをする場所です。障がいがあってもなくても、子どもの育ちのペースは一人一人違うもの。他人と比較してあせる必要はありません。子育ては一人でするものではないこと、頼れる家族や支援者が周りにいることを忘れないでほしいです。

命を尊重し、優しい心を育む性教育

CASE 2　伊藤さんファミリー　＝塩屋＝
（写真㊧から）月祈（つき）ちゃん　ジュリさん　葉琉（はる）くん　悟志（さとし）さん

日常で性に関する正しい知識を

塩屋に住む伊藤さんファミリー。リビングの真ん中にある本棚には、たくさんの絵本や図鑑が並んでいます。小学校2年生の月祈ちゃんと5歳の葉琉くんは、自分で好きな本を読んだり、読み聞かせをしてもらったりするのが日課です。

本棚をよく見ると、性に関する絵本や漫画もずらり。体の仕組みや赤ちゃんが生まれるまでのお話など、子どもが抱く疑問に答えられるよう分かりやすく描かれています。「子どもたちに、性に関する正しい知識を持ってほしい」と願う伊藤家では、日常の一部として絵本を使った性教育を行っています。

きっかけは、性差の認識不足

悟志さんとジュリさんが性教育を意識したきっかけは、夫婦間でも性差をきちんと認識できていないと気付いたことでした。

今から10年程前のこと、「食器が溜まっているけど、いつ洗うの？」という悟志さんの何気ない一言にイライラを募らせたジュリさんが、「今生理中でつらいの」と思わず口に―。女性に月経があることは分かっていたものの、このときはじめて妻の不調に気付いたという悟志さん。「どのくらいつらいものなのかと聞くと、『寝込むくらいつらいときもあれば軽いときもある』と教えてくれて、夫婦間でも知らない性差があることに驚いた」と振り返ります。

この出来事をきっかけに、男女の体の違いを教えることは大切だと考えた2人は、子どもが求めたら読み聞かせる自由なスタイルで、正しい情報を伝えてきました。

相手に共感できる優しい心

正しく知ることが優しさを育む

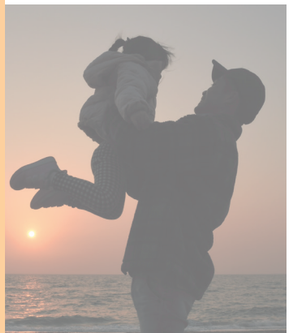
家庭での性教育を続けた結果、月祈ちゃんと葉琉くんの言動に変化が―。「生理中に一緒にお風呂に入ると、『大丈夫？今日は早く寝たら？』と気遣ってくれる」とジュリさんがほほ笑み、「男性と女性の体には命の種と卵があることを伝えてからは、ふざけてパンチをすることもなくなった」と悟志さんが振り返るように、男女の体の仕組みや違いを正しく知ることで、子どもたちの心に相手への共感や優しさが生まれています。

さらに、成長を続ける子どもたちから逆に教えられるうれしい出来事も―。赤ちゃんが生まれるまでの絵本を読んだ翌日、葉琉くんがジュリさんに、「最初に卵子にたどり着いた精子が赤ちゃんになるんだよね？」と質問しました。「そうだよ」と答えると、「じゃあ、僕もみんなも1番だから生まれてきたんだね」とにっこり。これには驚いたという悟志さんは、「性教育は、相手だけでなく自分自身の体や命を尊重することにもつながると気付かされました」と笑います。

互いに尊重し、相談し合える関係

「思っていることは口にしないと伝わらない」と考えている悟志さんとジュリさんは、性教育に限らず、毎日子どもの育ちを共有し相談しながら育児に取り組んできました。

ジュリさんの職場復帰に合わせて育児休暇を取得した悟志さんが、「子どもの世話をしていると、自分はトイレにすら行けなかったし、家事って大変なのにほめてもらえない仕事なんだと実感した」と話すように、家事・育児と仕事、両方の大変さを経験した伊藤さん夫婦。「夫婦であり、親友であり、一番のママ（パパ）友です」と互いに認め合う2人は、子どもに備わっている伸びる力を邪魔しないように、夫婦間でも親子間でも互いに尊重し合える関係性を築いています。



子育てに「正解」や「完璧」はありません。
悩んだとき、つらいときに忘れないでほしいのは、
決して一人じゃないということ。
あなたの味方はたくさんいます。
家族、地域、行政で力を合わせ、
お子さんの大切な命を
一緒に育んでいきましょう。

Interview　思いやりの心を育む関りを

対等な関係で何でも話し合ったり、共通の目的や関心を持ちながら一緒に活動したりできるのは家族の強みであり、これはお互いに思いやりの心を持っていないと成り立ちません。絵本や漫画の読み聞かせは、そんな心を育むための愛着形成に効果的です。

まずは、お子さんをよく知ることから始めましょう。家庭以外でも、集団生活での姿を見たり、健診や相談で第三者の意見を聞いたりすることも一つのヒントになります。思いやりの心を育むため、日々の生活の中でお子さんの表情や発する言葉に少し目を向けてみませんか。

子育て・健康課健康増進係
石川 桂 保健師

Consultation

はぐはぐは

妊娠中や子育て中の
お母さん、お父さんの味方です

松前町子育て世代包括支援センター「はぐはぐ」を知っていますか。

妊娠期から子育て期まで、皆さんが抱える不安や悩みを相談できるワンストップ窓口です。保健師、保育士、社会福祉士、助産師や栄養士などの専門職がいますので、何でも気軽にご相談ください。

出産に向けて何を準備すればいいの？

上手くおっぱいを飲んでくれない…。

ママ友、パパ友をつくりたい。

子どもの発達が気になる…。

予約が必要な相談、サークルや教室など詳しくは、広報まさき中綴じカレンダー「子育ての広場」をご覧ください。

問子育て・健康課　子育て支援係
☎ 985-4189（よいはぐ）
FAX 985-4158
✉hughug@town.masaki.ehime.jp

❖子育て援助活動支援事業

ちょっとした手助けがほしいとき、地域の子育てサポーターの育児援助が受けられる事業です。

【対象】 0歳～小学校 6年生
【内容】 保育施設などの送迎、育児不安による児童の援助など

利用料（補助制度もあります）や利用時間など詳しくは、下記までお問い合わせください。

問子育て・健康課　子育て支援係
☎ 960-3269